

まで歌わせるという自由さだった。

歌手の目玉はクリスティアン・ゲルハーヘルが歌う伯爵だが、芸術的に高いレベルでこの役を練り上げているので、イタリア語の発音が前に出て来ないのが惜しまれた。伯爵夫人に許しを乞う美しいフレーズを腹這いで歌わされるところなどで苦勞していたが、いちばん大きな拍手を集めていた。フィガロが当たり役のアレックス・エスポージトも、時には、存在感の薄い演出もみられる「題名役」を力演した。スザンナのオルガ・クルチンスカは、ロイがチューリヒ歌劇場で演出したベッリーニ《カプレーティとモンテッキ》のジュリエッタにも起用されており、お気に入りのようだ。時折、非生理的に感じられることもあるコンスタンティノス・カリディスの指揮に、ピツタリとついていく器用さが光った。ケルビーノは、練習期間から代役を任されたソレン・ラヴァノ＝リンケが好演した。彼女のケルビーノは7年前にすでに光っていたが、大舞台でも堂々と演じられる歌手に成長していた。

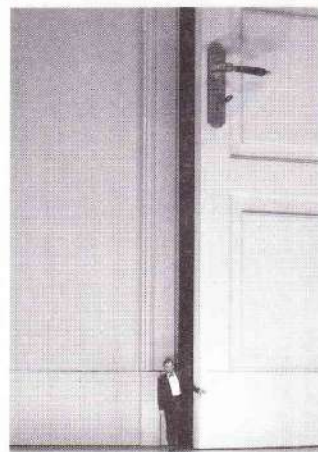
また、前世代のケルビーノだったアンネ・ソフィー・フォン・オッターは、マルチェッリーナ役に体当たりしていた。驚いたのは伯爵夫人のフェデリカ・ロンバルディだ。純イタリアの発声で、何の小細工もせず伯爵夫人を歌えるイタリア人が出て来たことが喜ばしい。

観劇後にせわしなさが残ったのは、やはり指揮者のテンポが強引だからだろう。今後、熟成していくことを祈りたい。  
(中東生)

【Opera】  
バイエルン州立歌劇場のシーズン・  
オープニング《フィガロの結婚》

アジア・ツアーから戻って間もなく、稽古が始まったバイエルン州立歌劇場では、小さい編成でできるモーツァルト・オペラ《フィガロの結婚》でシーズンの幕を開けた(10月28日所見)。クリストフ・ロイの新演出は、人形劇と、シーンごとにどんどん大きくなっていくドアがキーワードの、原作に忠実な現代版だ。息をつく暇もないほど超速で続く音楽と、そのぶん効果的な間をたっぷり取った、重い心理描写に裏付けられた下タバタ劇は、3時間の上演時間中飽きさせることがなかった。

チェンバロとピアノが交互に伴奏したり、時にはアカペラで独白させるなど変化に富んだレチタティーヴォをはじめ、独特のアイデアが散りばめられ、バルトロやバジリオのアリアもカットせず、マルチェッリーナにはモーツァルトの有名な歌曲《夕べの想い》



ロイの新演出では、シーンごとにどんどん大きくなっていくドアがキーワードだった。大きなドアの前のフィガロ(エスポージト) ©Wilfried Hösl